

アダム・スミスの資本蓄積論：A. スミスの生産力 体系序説（Ⅱ）

著者	榎並 洋介
雑誌名	星薬科大学紀要
号	16
ページ	1-18
発行年	1974
URL	http://id.nii.ac.jp/1240/00000027/

アダム・スミスの資本蓄積論

—A. スミスの生産力体系序説 (II)—

榎 並 洋 介

(星薬科大学)

On the Capital Accumulation of Adam Smith

—System of A. Smith's Civil Society (II)—

YOUSUKE ENAMI

(Hoshi College of Pharmacy)

1. はじめに
2. 生産的労働論 (b)
3. 資本蓄積論の本質
 - イ) 資本の維持と再生産
 - ロ) 投資の自然的順序論

1. はじめに

A. スミスは、その著『諸国民の富』の序論において、各国民の年々の労働こそがそのあらゆる生活必需品と便益品を供給する源泉であり、国民の富とはこの年々の労働が生産する生活必需品と便益品の大小によっていると述べている。このことは、重商主義者や重農主義者たちの偏向した狭隘な見解を打破して、労働一般を素材的富または諸使用価値の唯一の源泉であると宣言したことを意味していた。かかる基本的な認識を出発点として、スミスは、国民の富の増大はまず労働の生産力の増大によって規定されるとして、分業を高く評価する。ついで、有用で生産的な労働を雇用する資本の量およびその使用方法によって国富の増大が規定されるとする。

スミスは、国民の富を増加させるには一国の資本的資材 capital stock のうちどれだけを生産的

目的に使用し、どれだけを消費元本にくり入れるか、その分割の割合を問題にする。そのばあい、何が生産的であるのかということは、何が生産的でないのかという思想の強烈な批判からうまれてくる。スミスが資本制再生産の過程を

$$P \cdots \cdots W' \left\{ \begin{array}{l} W \cdots \cdots (G) \cdots \cdots W \cdots \cdots P \\ \cdots \cdots G' \cdots \cdots \\ w \cdots \cdots (g) \cdots \cdots w \end{array} \right.$$

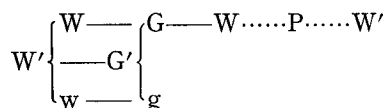
という生産資本の循環として把握しえたのは、なによりもまず重商主義者たちが社会の富の生産と流通を

$$G \cdots \cdots W \cdots \cdots P \cdots \cdots W' \left\{ \begin{array}{l} W \cdots \cdots G \\ \cdots \cdots G' \cdots \cdots \\ w \cdots \cdots g \end{array} \right.$$

という貨幣資本の流通形態として捉えていたことに対する批判からであった。

さらにスミスが上記の再生産過程を構築できた

のは、重農主義者たちが社会の再生産過程を



という商品資本の循環として把握していたことに
 対する批判からうまれたものである。しかしスミ
 ス自身、この学説が労働によって年々再生産され
 る消費可能な財貨に国民の富が在すると主張する
 のは正しい、と述べているように重農主義者たち
 から多くの示唆を受けている。もし一国の資財の
 うちより多くの部分が生産目的のために使用され
 るなら、有用で生産的な労働者がより多く雇用さ
 れるから、一国の富は自然に増加する。これに反
 して、もし一国の富のより多くの部分が消費目的
 のためにふりむけられることになれば、その結果
 として不生産的労働に従事する人々の数がふえ、
 国富の大きさも自然に減少せざるをえない。だか
 らもし生産力を一定とすれば、一国の富の大きさは
 資本的資材が生産的労働者の雇用のために用い
 られるか、それとも不生産的労働者の雇用のた
 めに用いられるかその割合如何によって決まる、と
 スミスは考える。したがって、富を増大させるた
 めにはなるべく多くの資料を生産的労働の使用に
 あてなければならない。これこそが資本の蓄積と
 再生産の基本的条件なのである。とくに、消費で
 なくて節儉を資本蓄積の本質的な構造として把握
 していることを考えると、節儉による資本蓄積お
 よび生産的労働者の維持と増大こそが、スミス経
 済学体系の枢軸をなすものといえる。

しかもそのばあい注意すべきは、資本が生産的
 労働者を維持するというだけでは、その蓄積構造
 を十分に把握したことにはならないということだ
 る。等額の資本をどういう方法で使用すれば生
 産的労働の量をふやせ、価値生産性を高められ
 るのかということもあわせて捉えなければならない。
 投資の自然的順序なるものが明らかになるこ

とによって、はじめて一国の資本の蓄積と再生産
 の全体的な把握が可能となる。本稿においてはこ
 れらの課題をスミスに内在しながら、しかも超越
 して展開できれば、その目的は一応達したことに
 なるであろう。

2. 生産的労働論 (b)

すでにわれわれはスミスの生産的労働に関する規
 定のしかたをみてきた。それは、第一に雇主に利
 潤を附加する労働であり、雇主に対してなんら利
 潤をつけくわえない労働は不生産的であるとい
 うこと。第二に、ある特定の永続性のある対象か
 または売ることのできる商品に固定し体現する労働
 であること。したがって、労働した瞬間に消滅し
 てしまうようなサービス労働は不生産的である
 ということ。これであった。かくして、第一の
 ものは利潤をもたらす労働、第二のものは商品を生
 産する労働として整理した。¹⁾

『諸国民の富』第2篇第3章の生産的労働論冒
 頭におけるスミスの叙述をみると、この第一規定
 と第二規定とが混在した形で表現されている。

周知の如く、資本制生産の直接の目的は剰余
 価値の生産であり、それを直接に生産する労働の
 みが生産的労働である。したがって、直接に生産
 過程で資本の増殖に役立つような労働が生産的労働
 となる。そこでは、資本家のために剰余価値を生
 産し、資本の価値増殖に役立つような労働でな
 なければならない。このように資本と交換される労働
 という規定は、資本家や貨幣所有者の立場から
 のものである。だからそこには、資本家と労働者
 という一定の生産関係・社会的生産関係の形態が
 よこたわっているわけである。それは歴史的な格
 として把握することを意味しているのであって、
 労働の生産物の性質や具体的な労働の規定からは
 決してひきだされるものではない。²⁾ ところが、
 スミスの第二の規定には、第一の規定のような正

1) 拙稿「A. スミスの生産力体系序説 (I)」の生産的労働論の項 (『星薬科大学紀要』No. 13, 1971)。

2) Karl Marx, Resultate des unmittelbaren Produktions Prozesses. 向坂逸郎訳『資本論綱要』(岩波文庫版
 所収) 208~209 頁参照。 Karl Marx, Theorien über den Mehrwert, I. Teil. Dietz Verlag Berlin.
 1956. SS. 120~123. 長谷部文雄訳『剰余価値学説史』第1分冊, 1966. (青木書店版) 216~220 頁参照。

しい資本主義的生産関係は見出しえない。むしろ、物質的商品を生産する労働だけが生産的労働であるというなかには、使用価値視点からの生産力の強調がよみとられるのである。

第二規定でスミスは、生産的労働の基準を商品を生産するか否かに帰着させている。しかも注意すべきは、スミス自身が「後者（召使—引用者）の労働もその価値をもっているのであって、前者（製造工—引用者）のそれと同じように当然その報酬を受けるべきものである」³⁾と述べていることである。これは何をいわんとするのであろうか。われわれは、マルクスとともに、その意味するところを検討し、その論理の不徹底さを明らかにすることによって、第二の規定が誤っていること。しかし、資本蓄積を念頭においていたスミスが、そう規定せざるを得なかったことを明らかにしていきたい。

さて、上記のスミスの規定は、召使の労働も製造工の労働もともに同じ価値をもっていること。したがって、ともに賃金を得るに値するのであるというとき、両方の労働が同じように価値をもったもの、つまり商品であることを認めていると理解できる。だが、それは物質的商品とは異ったものである。マルクスに従えば、「労働そのものは、その直接的定在、その生きた実在において、直接に商品としてはとらえられないのであって、ただ労働能力だけが直接に商品としてとらえられる。その労働能力の一時的発現が労働そのもののなのである」⁴⁾。

かくして、商品は物質的商品と労働力商品という二つのカテゴリーに区分されることになる。しかしながら、すべての商品はつねに過去の対象化された労働として現象するか、さもなければ労働能力そのものの形態でのみ現象するかのいずれか

である。しかしそれは直接に生きている労働としてではなく、賃金という規定のなかに現象する。だから、「生産的労働とは、商品を生産するような、または労働能力そのものを直接に生産し、形成し、発展させ、維持し、再生産するような労働」⁵⁾といえる。この労働能力それ自体を直接に生産し再生産する労働こそが生産的労働であるということは、労働力商品としての人間を形成し維持し、さらに発展させるために必要な諸費用に相当する労働を意味する。

もともと労働力の価値は、労働能力の維持や労働者の家族の維持養育、さらには高度な熟練労働者になるための教育や訓練などの諸費用によって規定される。とくに、熟練度や巧妙さを極度に要求するある一定の労働部門においては、労働能力はそれに対応していかなければならない。そのために一定の訓練を受けたり、教育を受けたりしなければならぬ。だから、このような修業費は、普通の労働力にとってはほんのわずかだとはいえ、労働力の生産に支出される価値の範囲に入る。⁶⁾ そのための諸費用は、労働力を再生産するための費用となる。したがって、教師や医師などのサービスの労働は自分自身その特殊性を維持したり、あるいは教授したり治療したりして労働能力を維持し形成し変化に対応させるよう労働するのであるから、この種のサービスの労働は労働能力の再生産費に入ってくるのである。なぜならば、産業的に必要なかぎりでの教師のサービスや健康を維持するかぎりでの医師のサービスなどは、そうすることによって販売しうる商品すなわち労働能力そのものを生み出すサービスであり、サービスの価値はその労働力の生産と再生産の費用に入るからである。

このように考えあわせてみると、スミスの第二

3) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Courses of the Wealth of Nations*, The Modern Library, p. 314. 以下、*Wealth of Nations* と略す。大内、松川訳「諸国民の富」(岩波文庫版)(Ⅱ) 337頁、以下、邦訳と称す。

4) K. Marx, *Theorien über den Mehrwert*, I. S. 134. 訳 236 頁。

5) K. Marx, *Theorien über den Mehrwert*, I. S. 135. 訳 238 頁。

6) K. Marx, *Das Kapital* (I), *Volksausgabe besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Institut*, Moskau 1932~4. SS. 178~180. 長谷部文雄訳『資本論』(青木書店版) (1の上), 320~322 頁、参照。

の規定，すなわち特定の対象または売ることのできる商品に固定し実現する労働，つまり商品を生産する労働が生産的であるという説明のなかには，直接に物質的な商品を生産する労働と，労働力そのものを直接に生産するサービス労働の両方の意味が含まれていることを見出すのである．ところが，スミスは召使はもちろんのこと，公共社会の使用人や教師，医師，音楽家，オペラ・ダンサーなどのサービス労働は，それがおこなわれる瞬間に消滅してしまっている特定の対象または販売しうる商品にその労働自体を固定したり実現したりしないから生産的であるとしている．だから，この後者の意味におけるサービス労働をスミスは，マルクスがいうように，生産的労働の項目から除外する．ここにわれわれはスミスの第二の規定の誤りを見出すのである．さきにも述べたように，資本主義的生産様式の直接の目的は剰余価値の造出であるから，それを生産する労働だけが生産的である．それは剰余価値生産の手段として，資本に役立つ労働である．労働過程からみれば，商品に実現される労働が生産的にみえる．だが，この過程はたんに資本の価値増殖のための手段にしかすぎない．スミスは，資本を生産する労働（目的）と，商品を生産する労働（手段）とを峻別しない．スミスが特定の対象や商品に固定し実現するような労働を生産的であるとしたのは，とにかく具体的なものに労働が固定され生産され，それが生産物として何らかの使用価値をもつからだとして理解したからにはほかならない．分業労働に基づくマニュファクチュアラーの生産物が商品として生産されているのを眼前にみたスミスが，資本主義社会の富を分業労働によって創出される物質的商品の形態として感性的・本能的にとらえていたことはむしろ正しいといえる．だが生産された商品だけをみて，それが資本主義的商品生産者によって生産されたものであるのか，あるいはたんなる小商品生産者によって生産されたものであるのかの区別がつかない．スミス自身はマニ

ュファクチュアラーを製造工または製造業者の意味として用いることによって，その言葉自体に多義性を与えているのではないかと解釈できる面がすくなくない．この点は重要なポイントでもあるので，労をいとわず，いまずこしスミスの主張を聞いてみよう．

「製造工の労働は，一般に，自分が加工する材料の価値に自分自身の生活維持費の価値と自分の親方の利潤の価値とを附加する．これに反して，召使の労働はどのような価値をも附加しない．なるほど，製造工は自分の賃金を自分の親方から前貸してもらってはいるけれど，こういう賃金の価値は，一般に，自分が労働を加えた対象の増大した価値のうちに利潤をともなって回収されるのであるから，実は主人にはなんの費用もかからない．ところが，召使の生活維持費は決して回収されないのである．……

とはいえ，後者の労働もその価値をもっているのであって，前者のそれと同じように当然その報酬をうけるべきものである．しかしながら，製造工の労働はある特定の対象または売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したりするのであって，こういう商品はこの労働がすんでしまったあとでも，すくなくともしばらくの間は存続するものなのである．それは，いわばある他のばあい必要に応じて使用されるために貯蓄され貯えられる一定量の労働である．この対象，またはそれと同一のことであるが，この対象の価格はあとになってからはじめにそれを生産したのと等量の労働を活動させることができる．これに反して召使の労働は，ある特定の対象または売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したりはしない．かれの労務は，一般にそれがおこなわれるまさにその瞬間に消滅してしまうのであって，あとになってからそれとひきかえに等量の労務を獲得しうるところのある痕跡，つまり価値をその背後にのこすということがめったにないのである．」⁷⁾

ここには明らかにマニュファクチュアラーを多

7) Adam Smith, *Wealth of Nations*, pp. 314~315. 邦訳 (Ⅱ) 337~338 頁.

義に解釈できる説明がよこたわっている。スミスは、資本家に雇用されている製造工から議論を進めておきながら、途中でこの製造工をたんなる商品生産者にすりかえてしまっている。資本家に雇用されている製造工を生産的労働者としてあげ、主人に雇われている召使を不生産的労働者の例として出し、この労働とつねに対比させながら、上記の引用箇所的前半においては、製造工の労働が生産的であるのは、材料の価値に、かれ自身の生活維持費（賃金の価値）と資本家の利潤の価値をつけくわえるからなのだと述べている。ところが、その後半においてはそうではない。製造工の労働が生産的であるのは、ある特定の対象または売却できる商品に固定し体现し、その労働がなされたあとでも少なくともしばらくのあいだはなくなる点に求めている。これは、いつか必要がおこったときに使うため貯蓄し蓄積しておかれる労働であるという。前半の規定では、生産的労働の維持に支出された価値は、増大した価値となって一定の利潤をとまって回収されるのに対して、後半の規定で、その労働の維持に支出された価値と同量の価値を再生産する労働として説明している。両方とも召使の労働と対比させながら、価値を増殖する労働＝利潤を生み出す労働という第一の規定と、労働の維持に用いられた価値と同じ量の価値をたんに再生産するにすぎない労働＝商品を生産する労働という第二の規定を等しく生産的労働だと述べていることになる。結局、こういう二重の規定は、資本主義的な労働者とたんなる小商品生産者とを混同することから生れたことは明らかである。

しかしながら、そうはいっても、第二の規定についていえば、スミス自身すくなくとも単純な小商品生産者を念頭においていたとはいえないことにも注意する必要がある。それは、例えばスミスが工業を不妊的で不生産的とする重農学説を批判して、工業における労働も農業の労働とともに生産的であることを証明している『諸国民の富』第

4 篇第 9 章をみれば明らかである。そこではスミスは次のようにいう。「第一に、この（工業—引用者）階級が、それ自身の年々の消費の価値を年々再生産し、この階級を扶養し (maintain)、雇用する資財または資本の存在を少なくとも継続させるということは認められている。……第二に、以上の理由から、工匠、製造業者および商人を召使と同一視するのはまったく不適切であるようにおもわれる。召使の労働は、かれらを扶養し雇用する元資の存在を継続させない。かれらを扶養したり雇用したりするのは、まったくかれらの主人の諸経費負担においてなされるのであって、かれらがおこなう仕事はこういう支出を払いもどすような性質のものではない。この仕事は、総じてかれらがそれをおこなうまさにその瞬間に消滅してしまうような労務に存し、かれらの賃金や生活維持資料の価値を回収しうるような売りさばくことのできるなんらかの商品にそれ自体を固定したりまたは実現したりするものではない。これに反し、工匠、製造業および商人の労働は、当然このような売りさばくことのできるなんらかの商品にそれ自体を固定したり実現したりするものである」。⁸⁾ スミスがここで年々の消費の価値の再生産または資本の存在の継続というばあい、それは資本主義的単純再生産を意味する。資本が労働を雇用するのは、その労働が剰余価値を生産するからである。もちろん、労働者の生活維持資料の全部は毎年消費されるから、そのぶんは毎年再生産されるのである。が、それだけのことであるならば、資本家は労働者を雇用してもなんのメリットもないことになる、労働者が剰余価値を生産するから、資本家はかれを雇うのである、であるのに、資本の維持をスミスが主張するのは、生産された剰余価値の全部が資本家によって個人的に消費されているからなのである。単純再生産と呼ぶゆえである。だから第二の規定においても、ただ単純な小商品生産者では決してなくて、剰余価値の生産がスミスの念頭にあったことはたしかである。そ

8) Adam Smith, *Wealth of Nations*, p. 639. 邦訳 (Ⅲ) 480～481 頁。

のうえで、工匠、製造業および商人の労働が召使の労働とちがって、かれの賃金ないし生活維持資料を回収できるような具体的な商品に自己の労働を実現するから生産的だといつてくわえているわけである。⁹⁾

このようにしてスミスの念頭におかれていたのは小商品生産者ではなかったとしても、結果的にはそういう解釈の余地を残してしまったことはスミス自身が生産的労働の形態規定性を明確に把握していなかったからなのだといわれてもしかたがないであろう。産業革命の前夜にいたスミスはこれらの内実の異った商品生産に気づかずに、もっぱら、物質的財貨を生産する労働こそが国民の富を増加させると擱んでいたとしても不思議ではない。たしかに、資本主義的生産が支配的な社会においては、商品をつくる労働も資本をつくる労働も、事実上、同じ労働をとおしてつくられる。この実際の一致こそが、第一規定と第二規定の一致に何んの矛盾もかんぜずに説明したスミスの意識だったのかもしれない。だとすれば、むしろこのことは、現象をとおしてみたスミスの健全な理解のしかたであったといえよう。

ところで、物質的財貨を生産する労働者の数が増加するには、絶えず資財が資本へ転化していかなければならない、そうすれば益々資本に雇用される労働者の数もふえ、分業も発達し生産力も増大する。そのばあい、資本の様々な用途や作用、効果といったものを把握することにより社会総資本の再生産の分析が可能となる。これらの問題を考えていくのが次の課題である。

3. 資本蓄積論の本質

1) 資本の維持と再生産

スミスは『諸国民の富』第2篇第1章「資財 stock の分類について」のなかで、資本を流動資本と固定資本にわけ、さらに流動資本を (1) 貨幣 (2) 食料品のストック (3) 衣服・家具および建築の未加工かまたは多少とも加工した材料 (4) 完成品の四部分にわけている。¹⁰⁾ そして、資本は「それがその使用者の所有にとどまるかまたは同一の形態にとどまるかするあいだは、その使用者になんの収入または利潤をもたらさない。…かれの資本はつねにある一つの形態でかれの手をはなれ、また別の形態でその手にかえってくるのであって、それがかれにある利潤をもたらすことができるのは、このような流動つまり継続的な交換によってだけである。」¹¹⁾ 主人をかえない固定資本といえども、かかる「流動資本を媒介とせずして収入をもたらすことは決してできない。」¹²⁾ という。スミスは、利潤をもたらすために資本が使用される二つの異った方法の区別をつうじて、一国の富は蓄蔵形態に固定された貨幣あるいは財貨の多寡に依存するのではなくて、豊富な財貨のたえざる再生産に依存するんだということをくりかえす。そのさい、マルクスが『資本論』第2部第10章「固定資本と流動資本に関する説学説、重商主義者と A. スミス」のなかで批判しているように、流動資本という規定のなかに埋没してしまって、流通形態にある資本、商品資本および貨幣資本と生産資本中の流動的部分を区別していないという混乱はある。¹³⁾ スミスが流動資本としてあげ

9) 内田義彦「経済学の生誕」1962. 305~323 頁参照。第二規定には剰余価値の生産がスミスの念頭におかれているという見解に対して、山田秀雄氏は、そう解釈できない説明もあり、むしろスミスは可変資本を再生産する労働をもって生産的労働と考えていたところがあると主張されている(同氏、「生産的労働について」『経済研究』[一橋大学経済研究所]第6巻第1号, 1955) 61 頁参照。

資本蓄積の視角からいえば、スミスは召使の労働と対比して、具体的な商品に固定化する労働が国富を増進するのだということを強調するに急なあまり、資本主義的労働者と小商品生産者とを十把一からげに捉えてしまった結果の混乱といえよう。

10) Adam Smith, *Wealth of Nations*, p. 266. 邦訳(Ⅱ) 243~244 頁。

11) Adam Smith, *Wealth of Nations*, pp. 26~263. 邦訳(Ⅱ) 244 頁。

12) Adam Smith, *Wealth of Nations*, p. 267. 邦訳(Ⅱ) 244 頁。

13) Karl Marx, *Das Kapital* (Ⅱ), S. 187. 訳(3) 247~248 頁参照。

る貨幣は貨幣資本であり、食料品、完成品は商品資本である。これに対して、未加工かまたは多少とも加工した材料は、販売されて主人をかえるために生産者あるいは商人の手もとで待機している限りでは商品資本であるが、生産者の手もとで加工の準備段階あるいは加工の過程そのもの、つまり生産的消費の過程にある限りでは生産資本である。このように、流通形態にある資本と生産資本とが区別されていない結果、これらの形態において資本のはたす異なる機能、すなわち一方は販売、購買という形式的な姿態変換の機能、他方は生産過程における生産資本要素の生産物への実体的な転形（実はこれを通じて、資本の価値が維持され剰余価値が生産される）という機能が、ともにある一つの形態でかれの手をはなれ、また別の形態でその手にかえてくるといような流動、つまり継続的交換という言葉で混同されたまま表現されているといえる。¹⁴⁾

スミスは『諸国民の富』第2篇第2章で、社会の総生産物の交換価値を賃金、利潤、地代の三つの収入に帰属させたあと、すぐに総収入と純収入の区別の問題に入っていく。まず、固定資本を維持するために「使用される職人たちは、かれらの労働の全価値を直接の消費のために留保されるかれらのストックにくりいれるかもしれないから、そういう労働の価格が純収入の一部をなすこともありうる」が、しかし固定資本そのものは生活資本ではないから、その維持費は「社会の純収入から除外されなければならない」。また、流動資本

については、それは個人にとっては資本であって、かれ自身の純収入ではないが、「他の人々のこういう（直接消費のために留保される一引用者）ストックにくりいれる」ということはありうる」。したがって、社会全体については貨幣を除く流動資本の三つの部分は、規則的にひきあげられて、社会の固定資本か、または直接消費のために留保されるストックかのいずれかにくりいれる。これらの消費される財貨の中で、およそ前者を維持するのに使用されぬものはすべて後者に帰し、社会の純収入の一部になると擱んでいる。¹⁵⁾ 固定資本を維持する労働について、かれらの賃金は収入であるが、生産物は収入の質料的要素ではないという事情に注目しているわけであるが、このことは賃金だけでなく、収入として消費される利潤についてもいえることである。また、スミスのいう流動資本中の衣服、家具および建築の未加工か、または多少とも加工した材料についても、価値のうえからいって、賃金および利潤をあらわす部分については、事情は固定資本のばあいと同じである。他方、流動資本の食料品、完成品のうち質料のうえからいって消費しうる財貨である部分は社会全体の収入が支出される消費ファンドをなすわけであるが、価値のうえからいえば、固定資本の維持費、材料費を回収する部分をふくんでいなければならない。このようなスミスの総収入と純収入との区別は、事実上、質料的にいえば、本来的資本である不変資本をふくむ資本の価値補填と質料補填の区別を意識していたとも考え

14) Karl Marx, Das Kapital (II), SS. 159~203. 訳 (3) 212~267 頁参照。スミスは、流通形態にある資本と生産資本を混同する結果として、資本家の手もとにある商品資本、食料品および完成品のうち、賃金によって買われる生活手段のストックの部分と賃金として労働力に投下される可変資本を同一視し、賃金（生活手段）が資本家の手から生産的労働者の手にわたり、労働によって消費されるという事実を、資本は資本家に対して資本家としての機能を果たしたのち、それらの労働者の収入を構成すると考える。これが、生産的労働者は資本によってやしなわれるという表現の基礎にあるスミスの認識であるが、資本家の手から労働者の手にわたってその収入になるのは、賃金たる貨幣あるいは生活手段であって、資本ではない。その交換を通じて、資本は流通資本の形態から労働力（生産資本）の形態に転化して、あくまで資本家の手にとどまっている。しかも、資本が現実には資本として機能して、その価値を維持し剰余価値を生産するのは、まさにこの生産資本の形態においてである。生産的に消費されるのは労働者にわたされる賃金ではなく、その交換を通じて資本に合体された労働者の労働力である。

15) Adam Smith, Wealth of Nations, p. 2271, p. 272. 邦訳 (II), 252 頁, 254 頁。

られる。だが、生産物の交換価値は賃金、利潤、地代の三つの収入に分解するという見解から生れる「A. スミスのドグマ」の結果として、不変資本の再生産、補填の問題は、結局スミスの視野から消えていくのである。そして、そのことが総資本の再生産の条件であるかのように表現されることになるわけである。¹⁶⁾

したがって、そこでは再生産のすべての流れは生活資料生産におかれ、その生活資料の価値と年々の労働の所産である純収入 ($v+m$) とが対応して把握されている。そこには、不変資本Cの再生産は捨象されている。だから再生産構造は、 $G—W[A]$ となり、かくして、

$$G—W[A]……P……W'— \\ —G' \begin{cases} G—W[A]……P \\ g—w \end{cases}$$

となる。分業がおこなわれ、労働の生産力が改善されるためには、あらかじめ材料、道具、食料品などのストックが蓄積されていなければならない。つまり、「かれを扶養し、かれにその仕事の材料や道具類を供給するにたりるさまざまな種類の財貨の貯量 stock がどこかに貯えられていなければならない。」¹⁷⁾ これをうけてスミスは生産的労働の定義をおこなう。そこでは、既にみてきたように、価値を生産するか否かが生産的労働と不生産的労働とを区別する基準とされていた。このことは、一般に、自分が加工する材料の価値に自分自身の生活維持費の価値と、自分の親方の利潤の価値とを附加するということであつた。すなわち、第一の規定では、 v (賃金の価値) と m

(利潤の価値) との両方の生産を意味する。と同時に、第二の規定では、あとになってからはじめに生産したのと等量の労働を活動させることができるようなある特定の対象、または売りさばきうる商品に製造工の労働を固定したり実現したりするということであつた。この規定は単に v (賃金の価値) の生産だけを意味する。しかも、その労働の体現された商品は必要に応じて使用されるために貯蓄され貯えられる一定量の労働である。¹⁸⁾

スミスは F. ケネーによって不生産階級としてとりあつかわれた商工階級のうち、労働者階級と資本家階級を別個の階級としてわけ、この二つの階級を一括した支出を分析して、資本家が労働者の雇用のために用いる前払いと、資本家自身の維持のための前払いとを区別していた。そして、そこでの単純再生産は、労働がつくりあげた剰余価値に相当するだけの価値の全部を資本家が個人的に消費したからにはかならなかった。このように労働者によってつくり出された剰余価値に相当するだけの全価値、つまり利潤が資本家の個人的な消費にあてられるという把握のしかたは、『諸国民の富』第1篇第7章の自然価格の箇所にもそのものと姿をみることが出来る。「かれ(資本家—引用者)の利潤は、かれの収入であり、かれの生存のための本源的な資源である。かれは自分が財貨を調整し、市場へもたらすあいだ、自分の職人たちに賃金または生活資料を前払いするのと同じように、自分自身にもその生活資料を前払いするのであつて、この生活資料は自分の財貨を売却することによって合理的に予期しうる利潤に一般に

16) 資本家によって前払される賃金の価値が利潤をともなって回収されるという過程がくりかえしておこなわれるためには、一方では労働者による賃金(必要生活手段)の消費がおこなわれると同時に、他方では総資本の一部によって消費される必要生活手段の再生産がおこなわれなければならない。これがこのばあいの再生産の条件である。ところが、スミスのばあいには総資本の再生産の条件、質料的な制約が、資本関係そのものに先行すべきストックの蓄積としてあらわれるのである(広田純「生産的および不生産的労働について」『立教経済学研究』第16巻、第3号、15頁参照)。

なお、小林賢齊「アダム・スミスの再生産論」(『武蔵大学論集、開学10周年記念論文集』1959)をも参照。
17) Adam Smith, *Wealth of Nations*, p. 259. 邦訳(Ⅱ), 232頁。

18) 商品が生産されて販売されるまでの期間、投下資本はストックの形態に固定され、流通部門に滞留しているのだから、このことは再生産過程を考えていくうえで重要である。資本の循環過程の資料的な属性として重要であるが、しかしそれは投下価値の資本としての持続ということとは無関係である。

相応するものなのである。」¹⁹⁾ すでにみたように、このばあいの利潤は自然価格の構成要素としての自然率ないしは通常率あるいは平均率での利潤を意味した。²⁰⁾ これが資本家の生活資料の本源的な源なのである。それは職人たちに前払いされる賃金と同じように、資本家が自分自身にもその生活資料を前払いする。いわば、資本家の生活維持費なのである。したがって、利潤は資本家の収入であり、それは全部的に資本家の生活維持費として消費されていくのである。そこでの利潤は、資本家自身に前払いしたかれ自身の生活維持費の回収にはほかならない。しかし、工匠および製造業者を雇用し扶養するのについやされる支出は、それ自体の価値の存在を継続させる。²¹⁾ つまり、工匠や製造業者の労働はあとになってからそれと等量の労働を支配しうる商品に対象化する。ここから、事実上、さきに図式した単純再生産の構造がうかがい出る。すなわち、ここでは $W'—G'$ として、同じ商品量として担当されていた資本価値と剰余価値の運動が、貨幣形態として自立することによって、 G と g に分裂し、 g は資本家の収入の支出として個人的に消費される。 G は資本価値の機能的形態として、その循環上の軌道を運動しつづけるわけである。しかも、このばあい、スミスは資本家と労働者とを共にストックによって維持される生産者として把握し、利潤とはストックの所有

者がかれ自身に前貸する生活維持費の回収にほかならないとする。資本家と労働者とが一括して生産者として把握されているとすれば、当然に利潤と賃金との区別がなくなり、利潤はいわば資本家の賃金として把握されるということになってしまふ。²²⁾

だからスミスが、工匠、製造業者および商人がかれらの社会の収入および富を増加させるのは、節儉によるほかないというばあい、収入つまり所得の資本への転換＝資本の蓄積は節儉、したがって貯蓄によって促進されると理解できる。すなわち、ある社会で実際に雇用されている有用労働の量の増加は、それを雇用する資本の増加に依存する。またこの資本を管理し指揮する特定の人々か、またこれらの人々に資本を貸す他の人々かが、収入のなかから貯蓄する額に等しい分だけ資本は増加するとスミスが考えても、その行論上、不思議ではない。²³⁾ 資本は節儉または貯蓄によって増加されるということを次のようにいう。「もろもろの資本は節儉によって増加され、浪費や不始末によって減少される。人は、自分の収入のなかから貯蓄するすべてのものを自分の資本に追加し、それを自分が生産的な人手の追加量を扶養するのに使用する……個人の資本がその年々の収入……のなかから貯蓄するものによってだけ増加しうるように、社会を構成する全個人の資本と同一物で

19) Adam Smith, *Wealth of Nations*, pp. 55~56. 邦訳 (I) 202~203 頁。

20) 拙稿、前掲書、利潤についての項の註 2) 参照。

21) Adam Smith, *Wealth of Nations*, pp. 630~631. 邦訳 (III) 466~467 頁参照。

22) Adam Smith, *Wealth of Nations*, p. 639. 邦訳 (III) 480~482 頁参照。

スミスが資本家の労働も直接に生産的労働であることにによって、資本機能を物質的生産の機能と同一視して、資本家そのものを生産的労働者と考えた。そして、その価値規定において一応交換価値の大きさを労働の量で規定しながら、結局、生産費説に転落していくことはまさにうらはらの関係にある、と広田純氏はいう (同氏「生産的および不生産的労働について」『立教経済学研究』第16巻、第3号、31~32頁)。また、富塚良三氏は次のように推察する。農業者はストックの所有者であり利潤の取得者であると同時にストックによって雇用されるものである。同様に、ストックによって雇用されるマニュファクチュアラーのうちにストックの所有者たる雇主、製造業者も事実上含まれている。だから資本家と賃労働者とは共にストックによって維持、雇用される生産者である。しかし、この把握においては、賃金と利潤との二様の所得範疇としての本質的区分が消失してしまうと (同氏「スミス蓄積論の基本構成」、内田義彦『古典経済学研究』上巻所収 1957, 199~200 頁)。

23) この理論上の背後にあるものは、当時の重商主義体制における不生産的寄生的な特権階級に批判の重点がおかれているのである。スミスは階級としての体制を与件と考えて、そのなかで資本増加の枠組を考えているのは決してないことに注意すべきである。

ある社会の資本もまたこれと同一の方法によってだけ増加しうるのである。勤労ではなく節儉が直接原因である。実際のところ、勤労は節儉が貯蓄する対象物を調達する。けれども、勤労がたとえどのようなものを獲得しようとも、節儉がそれを貯蓄し、貯蔵しないならば資本は増加しようにもけっしてできないであろう。」²⁴⁾ このように、スミスが資本蓄積の最大の原因を節儉、貯蓄に求めているのは、利潤を所得として理解しているからである。したがって、その所得をなるべく消費しないで節儉し、生産的労働者を雇用するファンドに使用するならば、全社会の富は増加するであろうと考える。だからスミスの資本蓄積の本質的な把握のしかたは、その構造がきわめて主観的色彩の濃い節儉論になってしまっているといえる。²⁵⁾

そこで、資本蓄積を節儉論として把握するとすれば、次のような表式が得られるであろう。

$$P \cdots W' \left\{ \begin{array}{l} W \text{---} (G) \text{---} W(w) \cdots P' \\ \text{---} G' \\ w \text{---} (g) \text{---} w \end{array} \right.$$

$w \text{---} (g)$ は $W \text{---} (G)$ という資本の循環にふくまれる。しかし、 $(g) \text{---} w$ は、その循環から分離されて、たんなる一般的商品流通を示す。だからそれは資本循環の範囲外でおこなわれる。資本価値としての W と剰余価値としての w の流通は、 (G) および (g) を媒介として分裂していく。したがって、「 (g) は、資本家の収入として支出されるが、 (G) の方は資本価値の機能的形態として循環上規定された自己の軌道を続行する」。²⁶⁾ $W' \text{---} G'$ は、 $(G) \text{---} W$ および $(g) \text{---} w$ との関連において、 $W \text{---} (G) \text{---} W$ および $w \text{---} (g) \text{---} w$ という普通の商品流通に属する相異なる二つの系列の流通として表示できる。そして、資本家

の収入の流通としての $w \text{---} (g) \text{---} w$ は、それ自身が独立してくるとなると資本家に投下された資本の運動に入りこまない。 (g) の貨幣は、貨幣としてだけ機能する。この流通の目的は、資本家の個人的な消費であるが、スミスが利潤を所得として理解し、したがって、その現象形態としての (g) をなるべく消費しないで節儉していけば、 (g) は、表式の $W \text{---} (G) \text{---} W(w)$ の (w) にふりこまれ、かくして、 $W \text{---} (G) \text{---} W(w)$ は、 $\bar{W} \text{---} (G) \text{---} W'$ となる。それは、生産的労働者を雇用するファンドとして使用され、ここに上記の如き節儉による再生産の構造としての表式が得られるのである。

ところで、スミスは『諸国民の富』第2篇第1章の冒頭において、資本家と労働者の生活維持費の補填のしかたを論じている。それは社会的再生産を考えるうえで有益とおもわれるので、少し長文ではあるが、引用してみよう。「ある人が所有する資財が、その人を数日または数週のあいだしか扶養するにたりないばあいには、かれはそれから収入をひきだそうなどとはめったに考えないものである。かれはできるだけつましく（原文は sparingly で“節約して”の意味—引用者）それを消費し、またそれがまったく消費しつくされてしまうまでには、自分の労働によってなにかそのかわりになるものを獲得しようと努力する。このばあい、かれの収入は自分の労働だけからひきだされる。これは、すべての国での労働貧民の大部分のものの状態なのである。しかしながら、この人が自分を数ヶ月または数年のあいだ扶養するにたりる資財を所有するばあいには、かれはその大部分から収入をひきだそうと努力し、自分の直接の消費のためにはその収入が入ってくるように

24) Adam Smith, *Wealth of Nations*, p. 321. 邦訳 (II) 351 頁。

25) マルクスは、利潤全体を資本家の収入と理解することにスミスの絶対的な誤りを求める。しかしスミスにとっては、資本を蓄積し、年々の生産物の交換価値を増大することが、資本家の節儉と労働者の勤勉に帰せられる一方、それ以外のあらゆる社会的機能（サービス）を営む人たちは、収入によってやしなわれ、資本蓄積を阻害するがゆえに浪費家、怠けものとして映ることになる。われわれは、ここに理論に先行した歴史批判家としてのスミス像をみるおもいがする。

26) Karl Marx, *Das Kapital* (II), S. 63. 訳 (3) 89 頁。

なるまで自分を扶養しうるだけのものを留保しておくのである。それゆえ、かれの全資財は二つの部分に区別される。すなわち、それが自分にこの収入をもたらしてくれるものと期待する部分は、かれの資本と呼ばれる。他の部分は、かれの直接の消費を充足するもの」である。²⁷⁾ つまり、労働者は労働によって資本のストックから前貸された収入で最初の生活維持費を補填する。資本家はストックのキャピタルとしての前貸による収入によって、かれ自身のストックのうちからかれ自身に前貸された生活維持費を補填する。既にみたように、賃金と利潤はここでも収入つまり生活維持費の回収として理解されているのである。他方、資本がストックとして把握され、資本家も労働者も共にこのストックによって維持されるとする。したがって、社会的再生産の過程が、たんに消費的富の生産と消費との反覆過程としてとらえられているのである。このことは事実上、次のような資本の循環表式を意味する。

$$P \cdots \cdots W' \text{---} G' \left\{ \begin{array}{l} (G) \text{---} W \cdots \cdots P \\ (g) \text{---} w \end{array} \right.$$

$W' \text{---} G'$ では、まだ共通で同じ商品量によって担当されていた資本価値と剰余価値との運動が、貨幣形態として独立することによって (G) と (g) に分裂する。前述したように、 g は資本家の収入として支出される。 (G) は資本価値の機能的形態として軌道を循環し、その運動を続行する。 $W' \text{---} G'$ は、 $(G) \text{---} W$ および $(g) \text{---} w$ との関連においては、 $W \text{---} (G) \text{---} W$ および $w \text{---} (g) \text{---} w$ というたんなる商品流通に属する二つの相異なる系列として表示される。かくして、

$$P \cdots \cdots W \text{---} (G) \text{---} W \cdots \cdots P \\ w \text{---} (g) \text{---} w$$

が得られる。マルクスが説明するように、資本家の収入の流通としての $W \text{---} (g) \text{---} w$ は、 w が商品資本という機能形態にある資本の価値部分たるかぎりでのみ資本流通に入りこむ。だが、それは $(g) \text{---} w$ によって、つまり $W \text{---} (g) \text{---} w$ なる全形態において自立するや否や、資本家によって投下された資本の運動には、この運動から出てくるのではあるが、入りこまないのである。²⁸⁾

ロ) 投資の自然的順序論

国富増進の条件は、労働の生産力を増進させることのほかに、既にみてきたように生産的労働者の数を増加させることであった。すなわち、生産的労働者の維持にあてられる基金たる資本を蓄積することであった。だがこのばあい重要なことは、たとえすべての資本が生産的労働だけを維持するために使用されるものだとしても、等量の資本の用途の多様性いかんによって、活動させる労働の量、したがって労働生産物の附加価値量は、はなはだしく異ってくるということである。したがって、等額の資本を使用するばあい、その投資方法いかんによっては国富増大に大きな差が生じてくる。この意味で、どの産業にどういう順序で資本を投下するのかという問題は、一国の資本蓄積あるいは国民の富の増大を考えるうえできわめて大きなウェイトを占めてくるのである。

スミスはいう。「たとえすべての資本は、生産的労働だけを維持するために予定されたものであるにしても、等量の資本が活動させうる労働の量は、その用途の多様性に応じてはなはだしく異なるし、またこれと同様に、この用途がその国の土地及び労働の年々の生産物に附加する価値もはなはだしく異なるのである。」²⁹⁾ スミスによれば、等額の資本が異なる産業部門に投下されたばあ

27) Adam Smith, *Wealth of Nations*, p. 262. 邦訳 (II) 235 頁。

28) Karl Marx, *Das Kapital*. (II) S. 64. 訳 (3) 91 頁。

マルクスはさらに一般流通の部分たるかぎりでの資本循環と、自立的な一循環の環たるかぎりでの資本循環の関係は、 $G' = G + g$ の流通を考察すれば明らかになるとし、価値生産物のうち収入として消費される部分の流通を資本の特徵的循環だと称するのは、識見狭小だとしてスミスを非難している (同書, S. 65. 訳 (3) 92~93 頁)。

29) Adam Smith, *Wealth of Nations*, p. 341. 邦訳 (II) 340 頁。

い、その等額の資本によって活動させられる生産的労働の量は、必ずしも同じではないという。そこで、四つの資本の用途を区別していく。

まず第一に、社会の使用および消費のために年々に必要とされる粗生産物を調達するために使用されるもの。これらは土地、鉱山または漁場の改良、または耕作を企てるすべての人々の資本である。第二に、直接使用および消費のためにこの粗生産物を製造したり、調整したりするために使用されるもの。これは親方製造業者の資本である。第三に、粗生産物かまたは製造品かのいずれかをそれらの物が潤沢な地方から欠乏している地方へ運送するために使用されるもの。これは卸売商人の資本である。第四に、粗生産物が製造品の特定部分を、それを必要とする人々の随時的な需要に適するような小口に分割するために使用されるもの。これは小売業者の資本である。とくに、卸売商人の資本を国内商業、消費物の外国貿易、仲継貿易に細分していることは、スミスの重商主義批判のための伏在を示すものとして注意されるべきである。以上四つの方法のいずれかに自分の資本が使用されている人々は、生産的労働者である。かれらの労働は、売りさばきうる商品に固定され、実現されている。ということは、その商品の価格にかれら自身の生活資料および消費物の価値を附加しているということである。このばあい、利潤はすべて農業者や製造業者が生産する。商人の利潤は、売買する財貨からひき出される。といっても、等額の資本の使用方法が異なれば、直接に生産的労働にも差異が生じるであろうし、社会の土地および労働の年々の生産物の価値を増加させる割合にも差異が生じるであろう、とスミスは考える。³⁰⁾

スミスの分類をもうすこしおおざっぱに分けてみると、第一のものは、主として農業として、第二のものは工業（製造業）として、さらに第三、第四のものは商業として整理できるであろう。以

下便宜上、製造業は工業として規定する。

そうであるならば商業と工業とはどういうものとしてとらえられ、その関係はどのようなのであろうか。スミスはいう、「卸売商人の資本は、かれがとりあつかう粗生産物および製造品を購入する農業者や製造業者の資本をその利潤とともに回収し、そうすることによってかれらがそれぞれの職業を継続することを可能にする。主として、こういうサービスによってこそかれはその社会の生産的労働を維持し、そしてその年々の生産物の価値を増加させるのに間接に寄与するのである。そのうえ、かれの資本はその財貨がある地方からもう一つの地方へ運送する水夫や仲立人を使用して、またそれはこれらの財貨の価格を自分の利潤の価値だけではなく、水夫や仲立人の賃金の価値だけ増加させるのである。これが、この資本が直接に活動させる生産的労働のすべてであり、またこれが、この資本が年々の生産物に直接に附加する価値のすべてである。」³¹⁾

これに対して工業はどうか、「親方製造業者の資本の一部は、固定資本としてかれの職業上の用具に使用され、かれがこれらの用具を購入する他の若干の工匠の資本をその利潤とともに回収する。かれの流動資本の一部は、材料を購入するのに使用され、かれがこれらの材料を購入する農業者や鉱山業の資本をその利潤とともに回収する。けれども、その一大部分は、つねに、年々にであれ、それよりもはるかに短期間にであれ、かれが使用するさまざまな職人のあいだに分解される。それは、これらの材料の価値をかれらの賃金とその事業に使用された賃金、材料および職業上の用具という全資材に対する親方の利潤との分だけ増加させる。それゆえ、この資本はどのような卸売商人の手中にある等額の資本よりもはるかに多量の生産的労働を直接に活動させ、またその社会の土地および年々の生産物にはるか多量の価値を附加するのである。」³²⁾

30) Adam Smith, *Wealth of Nations*, pp. 341~343. 邦訳 (Ⅱ) 390~394 頁.

31) Adam Smith, *Wealth of Nations*, pp. 343~344. 邦訳 (Ⅱ) 395 頁.

32) Adam Smith, *Wealth of Nations*, p. 344. 邦訳 (Ⅱ) 395~396 頁.

みられるとおり、商業資本は、価値の面からいえば、大部分間接的に寄与することによって、結果的には社会の生産的労働の量を決定する。農業や製造業の工業資本の循環を媒介することによって、その社会の生産的労働の維持に間接的に寄与しているわけである。しかし、直接的に価値の増加に寄与している資本部分もある。商業資本のうちでも財貨を運送する運輸、交通業の労働者を雇用するための資本部分がこれである。この部分は、直接に自分たちの賃金の価値だけ増加させるところの生産的労働である。この資本は年々の生産物に直接に附加する価値のすべてであるが、商業資本の全体のなかではごく小さな割合を占めているにすぎないものである。これに対して、工業資本は、その資本の大部分は直接に多量の生産的労働を活動させる役割をはたし、したがって年々の生産物の価値を附加する。それは商業資本とはくらべものにならないくらいである。固定資本部分や原料、材料にあてられる流動資本部分は、他の工業資本の循環を媒介する役割だけであるので、この部分は間接的にしか生産的労働を維持するのに役立たないけれども、これは工業全体からみれば小部分にしかすぎない。残りの流動資本のすべては、商人資本よりもはるかに多くの生産的労働を直接的に維持し活動させており、これが工業資本のなかで非常に大きな部分を占めている。もちろん、このばあい、二つの資本の機能のちがいを基準にして、商業資本と工業資本を範疇的に区分してスミスは考えている。たんなる生産的労働の量の多寡から二つの資本を区別しているとはいいいがたい。資

本の用途の多様性に応じて、等量の資本が活動させる生産的労働の量は異なり、したがって一国の土地および労働の年々の生産物に附加する価値も異なってくるからである。³³⁾ かくして、等額の資本が商業と工業とに投下されたばあい、明らかに商業への投資が国民経済にとって不利な投資方法であるとスミスは捉えている。商業よりも工業の優位なることが、これで理解できたわけである。

では農業と工業との関係はどうであろうか。等額の資本をこの二つの産業に投下したばあい、どちらが国民経済にとって有利なのであろうか。スミスは農業について次のようにいう。「等額の資本のうちでは、農業者の資本ほど多量の生産的労働を活動させるものはない。かれらの労働する使用人ばかりでなく、かれの役畜もまた生産的労働者なのである。そのうえ、農業においては自然もまた人間とならんで労働するのであって、しかも自然の労働にはなんの経費もかからないけれども、その生産物はいっしょに経費のかかる職人のそれと同様にその価値をもっているのである。³⁴⁾…それゆえ、農業に使用される労働者および役畜は、製造業における職人のように自分自身の消費物に等しい価値、すなわち、かれを使用する資本に等しい価値をその資本の所有者たちの利潤とともに再生産するばかりではなく、それよりもはるかに多くの価値の再生産をひきおこす。すなわち、かれらは農業者の資本およびそのすべての利潤をこえてなおそれ以上に、地主の地代の再生産をも規則的にひきおこすのである。この地代は、その使用を地主が農業に貸付けている自然の諸力

33) 例えば、スミスが商業資本と工業資本を範疇的に区分して捉えていたとする見解としては、内田義彦氏「スミスの国富論体系」(『経済学史講座』(I) 1965, 所収 136~137 頁)がある。これに対して、羽鳥卓也氏は、スミスは二つの資本の範疇的区分をくわだてたとはいえないとして次のようにいわれる、「スミスの議論のポイントは、むしろ双方の資本のそれぞれによって直接に活動させられる生産的労働の量的差異という点におかれているように思われる」としている。同氏、「アダム・スミスの蓄積と再生産の理論」(大河内一男編『国富論研究』(I) 1972, 所収, 171 頁)。しかし、これは資本の機能が範疇的に区分された結果として、生産的労働の量的差異がひきおこされたと考えるべきではなかろうか。

34) しかしながら、「もしこういう粗生産物が自然発生的に生産されるならば、それにはなんの交換価値もないであろうから、それは社会の富になにものをも附加しえないであろう」(A. Smith, *Wealth of Nations*, p. 341. 邦訳(Ⅲ) 391 頁)と述べているところをみると、われわれはスミスのなかに理論的な混乱をかんじないわけにはいかない。

の生産物とみなしてさしつかえない。」³⁵⁾ これに対して、工業は農業の下位に在るということを次のようにいう。「製造業で使用する等量の生産的労働は、けっしてこれほど多大の再生産をひきおこすことができない。製造業においては、自然はなにごとくもせず、人間がいっさいのことをなすのであって、再生産はつねにそれをひきおこす諸動因の力に比例せざるをえない。それゆえ、農業に使用される資本は、製造業に使用されるどのような等額の資本よりも多量の生産的労働を活動させるばかりではなく、それが使用する生産的労働の量に対する割合においてもまた、その国の土地および年々の生産物に、つまりその住民の実質的富および収入にはるかに多くの価値を附加するのである。それは、資本が使用されうるいっさいの方法のなかで、社会にとってにはるかにこのうえもなく有利なものである。」³⁶⁾

スミスによれば、等額の資本を農業と工業に投下するとすれば、農業への投資が一国にとって資本が使用されるばあいの最も有利な方法ということである。なぜか。農業資本は、労働者も、役畜も！はては自然までも！生産的労働として活動させるからであるという。その生産的労働は、農業資本の所有者たちの利潤や労働者を使用する資本に等しい価値以上に地主の地代までもひきおこす。かくして、農業への投資によって年々の生産物に附加される価値額は、その割合からみても工業のその比ではない。工業では自然はなにもしないから、活動させる生産的労働の量からみても、また一国の生産物に附加される価値額からみても、農業資本のほうがはるかに有利であるとする。スミスは、この農業の優位性の思想をさらに『諸国民の富』第3篇第1章の「富裕の自然的進歩」の箇所ですべてのようにとらえる。「生活資料は、事物の性質上、便益品やぜいたく品に先だつものであるから、前者を調達する産業は必然に後

者に奉仕する産業に先だたざるをえない。それゆえ、生活資料を提供するいなかの耕作や改良は、必然に、便益やぜいたく的手段しか提供しない都会の拡大に先だたざるをえないのである。いなかの余剰生産物だけが、つまり耕作者の生活維持以上のものだけが都会の生活資料を構成するのであるから、都会はこの余剰生産物が増加してはじめて拡大しうる。」事物のこういう順序は、農業に対する人間の自然的な好みによって助長されるとして、さらにつづけていう。「たとえあらゆる国においてそうだとはいかぎらないにしても、一般に必要な上そうなところの事物のこういう順序は、どの国においても人間の自然の性向によって促進される。もし人間がつくった諸制度がこういう自然の傾向を全然さまたげなかったならば、都会は、すくなくともそれが位置する全領域が完全に耕作され改良されるようになるまでは、どのようなところにおいても、その領域の改良や耕作によって維持されうる以上には拡大されえなかったであろう。というのは利潤が等しいかまたはほぼ等しいばあいには、たいいてい人は自分たちの資本を製造業または外国貿易に使用するよりも、むしろ土地の改良や耕作に使用するほうを選ぶであろうからである。」同様に、³⁷⁾「資本の用途をみつけばあい、利潤が等しいかまたはほぼ等しければ、自然、外国商業よりも製造業が選好されるのであって、それは、自然、製造業よりも農業が選好されるのと同じ理由によるのである。」かくして、「事物の自然的運行によれば、あらゆる発展的な社会の資本の大部分は、まず第一に農業にふりむけられ、つぎに製造業にふりむけられ、そして最後に外国商業にふりむけられる。事物のこの順序は、ひじょうに自然であるからかりにも領土をもつほどのものであれば、どのような社会においても程度の差こそあれ、つねに観察されてきたのだ」とスミスは確信する。³⁷⁾ こうして、スミ

35) Adam Smith, *Wealth of Nations*, p. 344. 邦訳 (Ⅱ) 396~397 頁.

36) Adam Smith, *Wealth of Nations*, p. 345. 邦訳 (Ⅱ) 397 頁.

37) 以上の引用は、Adam Smith, *Wealth of Nations*, pp. 357~360. 邦訳 (Ⅱ) 421~427 頁.

スは、発展的な社会においては、農業—工業—商業という投資の自然的順序がみられると主張する。

産業発展の自然的順序に関するスミスの主張の背後には、明らかに重商主義政策への批判が伏在している。保護政策により一部の特権的な階級が不当な利益をえて、産業の自然な発達を阻止している。自生的に発達してくる産業のエネルギーを人為的で反自然的な重商主義政策が摘みとっているという事実認識からの発想であると理解してよい。³⁸⁾ それでは、なぜ農業—工業—商業という順序が産業の自然的な発達順序であるのか。なぜ、それが富裕の自然的な進歩を表わすものなのであろうか。スミスの行論を追ってみると、農業は、人間が生活していくうえに必要な基本的資料を生産する部門である。農業者の余剰生産が提供されることにより、それを素材として加工し、便益品や奢侈品を生産していくのが工業である。さらに、農産物や製造品を運搬していく産業が商業である、ということになっている。だから、一国の産業発達を考えるばあい、農業が他のどんな産業よりも土台となり、核として位置づけられている。農業が発達すれば、工業が発達するという、いわば農本主義の思想が流れているが、これは重農主義の学説にスミスが傾斜していることのあらわれであろう。スミスが農業労働者と同じように、牛や馬などの役畜を生産的労働とみなし、さらに自然までもが人間とならんで労働すると主張するのはそのためである。とはいえ、農業においては、自然や役畜の労働によって工業よりもより多くの生産的労働を活動させ、したがってより多くの価値を附加する。役畜も自然も生産的労働者

で価値形成にくわわっているのだとスミスがいうばあい、このことをどう解釈すればよいのであろうか。困惑してしまう。なぜなら、われわれは既に投下労働こそが価値の源泉であることをみてきたからである。³⁹⁾ すなわち、価値をつくりあげるのは、あくまでも生産的労働者が投下した労働だけであり、その労働が追加価値をつくりあげ、しかもそれが利潤と地代になるということを見てきた。であるのに、ここでは、スミスは役畜も自然も生産的労働で価値形成に参加しているというのだ。なぜか。

製造業の資財は雇主が労働者を雇用し扶養するために予定されるもので、それは労働者に前払いされる原料、用具および賃金からなるものである。一方、その資財は雇主自身の生活を維持するためにも前払いされる。つまり、労働者の資財への働きかけによって労働生産物のなかに含まれる利潤が、雇主の生活維持費にあらわれる。このように重農学派によって一括されていた不生産的階級を、スミスは雇主（＝資本家）と労働者という異った二つの範疇に区分する。資本家が労働者の雇用のために用いる前払いと、資本家自身の生活維持費のための前払いとははっきり区分する。したがって、資本家はこの二種類のの前払いという全支出を払いもどせばよいことになる。それで目的は一応達成したことになる。そのさい注意すべきことは、労働者が自分自身の生活維持費のほか、資本家のための生活維持費をもつくり出しているということである。このことは、事実上、工業労働者が剰余価値をつくり出していることを意味する。ところが、製造業の資財の利潤というのは、土地の地代とは異なって、利潤を得るため

38) 高島善哉『スミス「国富論」理論篇』（昭 37）、158～160 頁参照。なお、重商主義政策とスミスとの関連は、歴史批判としての『諸国民の富』として考えていかなければならない課題である。

39) 拙稿、前掲書 39～40 頁参照。

内田義彦氏は、これはスミスが投下労働を放棄した必然的結果であるとして、次のようにいわれる。「第一スミス自体の論理からも逸脱しています。かれの追加価値の理論は、生産的労働者のみが価値をつくる。それが地代および利潤に分解するというのであったはずですが。そして、かれの資本蓄積論は、これを基礎にして分業労働の維持と拡大を枢軸にして構築されていたはずですが。役畜をもって生産的労働とみなすというこの挿入は、スミス自体の全体系をくつがえしてしまいます」と（同氏『経済学史講義』1964、207 頁）。

に支出されなければならない全支出を完全に払いもどしたあとにのこる純生産物ではないから、資本家は労働者がつくり出した剰余価値に相当する価値の全部をただ個人的に消費していることになる。したがって、工業や製造業者を雇用し扶養するために費された支出は、いわばそれ自体の価値の存在を継続させるだけであって、全剰余価値が資本家によって個人的に消費されるために新しい価値をすこしも生産しないのである。だから、資本家の価値はいつも同じ大きさに維持されているわけである。この価値の存在の継続は、この意味において、資本の単純再生産を意味していた。

これに対して、農業者やいなかの労働者を雇用するために費された支出は、それ自体の価値の存在を継続させて、なおそのうえに新しい価値、つまり地主の地代を生産する。このことは、工業労働がたんに価値の存続のみに終わっているのにくらべて、農業労働は従来の価値の維持、存続に加えて、地主に地代という剰余までも創出することを意味する。⁴⁰⁾ 工業資本が労働生産物の価格総額のなかに資本投下の回収部分と利潤とをふくんでいるのに対して、農業資本のばあいには、その農産物の価格総額のなかに投下資本の回収部分と利潤と、さらに地主の地代の価値分までもがふくまれていることになる。だから、スミスには、地代の部分だけ工業にくらべて農業の方に生産される価値量が多いと映ったのであろう。

地代が自然の労働によってもたらされるものだということは、資本に雇用されている生産的労働が追加価値をつくりだし、それが利潤と地代とに分解するという論理と相容れないものになる。このことはスミスの地代把握のしかたに混乱があるからだといわなければならないのであるが、しかし、もう一步スミスに内在してみると、そのなかに自然の労働を要請せざるを得ないような論理的帰結があるようにおもえる。利潤というものは、なんといっても資本の大きさに応じてきまるので、企業家は小さな資本よりも大きな資本を使用することに魅力をかんじる。利潤というものは、使用される資財の価値の大きさに比例して規定されるものだとスミスが考えるとき、そこには、異なった産業部門間における平均利潤率が想定されていることに気づく。⁴¹⁾ しかもこのばあい、等額の資本を投下するとすれば、異種部門間における費用価格も等額となり、これに平均利潤率を乗じて得られた平均利潤は、生産的労働がつくりだす追加価値量に等しくなる。もしそうならば、この追加価値量は、工業資本のばあいも農業資本のばあいも平均利潤に等しい価値量ということになる。ところが、この論理では農業の優位性が、したがって地代が説明できなくなってしまう。追加価値量が平均利潤量であるとなると、地代の説明には、結局、役畜の労働や自然の労働をもってこないことには説明がつかなくなってしまうのである。⁴²⁾

40) Adam Smith, *Wealth of Nations*, pp. 630~631. 邦訳(Ⅲ) 466 頁参照。なお、内田義彦『経済学の生誕』1962, 321 頁参照。

41) Adam Smith, *Wealth of Nations*, pp. 48~49. 邦訳(Ⅰ) 186~187 頁参照。

高島善哉教授は、農業生産の利潤を工業生産の利潤をもふくめたところの平均利潤としてとらえ、地代をその超過利潤＝自然地代として把握する(同氏、『アダム・スミスの市民社会体系』新版, 昭 49, 180 頁)。羽鳥卓也氏は、投下資本額に利潤が比例するためには利潤率平均化のメカニズムが前提となっているとして、異種部門間での利潤を平均利潤としてとらえ、地代を自然の労働の所産として把握する(同氏、『古典派経済学の基本問題』1972, 53 頁)。両氏とも若干着想のちがいがいいまわしに差異があるけれども、スミスの利潤を平均利潤として把握していることにちがいはない。

42) 羽鳥卓也氏は、内田義彦氏がスミスの追加価値の理論は生産的労働者のみが価値をつくり、これが地代および利潤に分解するという主張に対して、次のようにいわれる。「わたしは内田氏のスミス解釈に異議をとえな。スミスのばあい、資本に雇用される労働が追加価値をつくとされるのだが、この追加価値はすべて利潤になるのであって、ここからは地代は引出されないのである」と(同氏、『古典派経済学の基本問題』1972, 71~72 頁)。傾聴に値する分析であるといえよう。なお、内田義彦『経済学講義』1964, 207 頁参照。

しかしまた、『諸国民の富』第1篇第11章の地代論をみると、スミスが、農業および工業の平均利潤をこえた超過利潤を地代の部分としてみていることはたしかなようである。地主が土地改良のためについやした資財に対する合理的な利潤や利子と区別して、スミスは、地代は土地の使用に対して支払われる価格であるという正しい規定をする。そして、土地生産物が、資本投下の回収部分と利潤をふくむ価格以上の市場価格で決定すれば、その余剰部分が自然に土地の地代になるという。農業生産物というものは、人間が生存するための基礎食糧であるから、つねに有効需要が食糧の供給を上回る傾向にある。だから、農業生産物はつねに地代を生むんだと考える。このことをとくに人口の増加と農業の価値生産性の優位という思想で説明していく。すなわち、スミスはいう。「人間は、他のすべての動物と同じように、その生活水準に比例して自然に増殖するものだから、食物に対する需要はつねに多少とも存在する。食物はつねに多量または少量の労働を購買支配できるのであって、しかもこれを獲得するためによろこんでなにごとかをしようといういく人か人は、いつでもかならずいるものである。……ところが土地は、ほとんどどのような位置にあるものでも、食物を市場へもたらすのに必要ないさいの労働を維持するにたりるより以上に、多量の食物を生産するのであって、……そのうえ、つねにこの剰余はこの労働を使用した資財をその利潤とともに回収してなおあまりあるものである。それゆえ、地主に対する地代としてつねになにほどこ

のものがのこる。」⁴³⁾ 人間はたえずその生活手段に比例して、あるいは超えて増加するから、食糧に対する需要はつねに存在する。そのばあい、有効需要はつねに供給を上回る傾向にあるから、食糧の価格は不断に騰貴する。したがって、農業の利潤はつねに超過利潤をうる。ここから地主に対する地代がつねに生れてくるのだ。こういう論理展開がスミスにはっきりと確認できるのである。

ともあれ、こうした地代の把握のしかたによって、スミスは一国の産業発展を考えるばあい、農業の資本投下を最優先するのが最も有利な方法なのだと結論する。かくして、農業—工業—商業という投資序列が最も自然な順序、一国の富裕の自然的進歩の順位なのだとする。⁴⁴⁾ スミスはこの投資の自然的順序を遵守すれば、一国の産業は自然な構造をかたちづくって発達し、したがって資本の蓄積をいっそう促進し、国富も増大するのだと考える。スミスをとりまいていた重商主義政策体系というものは、この投資の自然的順序を歪曲した人為的で反自然的なものとして論駁の対象となる。『諸国民の富』第3篇以下の歴史分析と政策体系の批判は、われわれがすでにみてきた生産的労働と不生産的労働および資本の再生産というスミスの資本蓄積論を基礎視点として展開されている。とくに、自生的な産業資本の発達を妨げる大商業資本家と国家権力との癒着による独占政策と保護政策を鋭く批判していく。そこには、経済理論的な混乱をひきおこしていたスミスよりも、時論家としての、あるいは経済政策家としてのスミスが力強く登場する。いわば、「リベラリスト—

43) Adam Smith, *Wealth of Nations*, p. 146. 邦訳 (Ⅱ) 11~12 頁。

44) 相見志郎氏は、農—工—商というスミスの自然的順序は、スミス自身の論理から内的必然性的には生じてこないといわれる。とくに、「スミスは農業において生ずる地代をもって農業労働の生産性の優位の印しとしているが、問題のあるところであろう」とされている (同氏『国富論』における若干の問題点「経済学論叢」[同志社大学] 16-5, 99 頁)。しかしながら、「この指摘は、労働の生産性の相違を問題にしているようであるが、スミスは労働の価値生産性を問題にしているのだから、少しちがうのではないかとおもわれる」と羽鳥卓也氏は異議をとなえておられる (同氏、『古典派経済学の基本問題』1972, 70 頁)。この異議には同感であり、スミスに即してみるかぎり妥当であるというべきであろう。

スミスは、ナショナリスト・スミスと手を携えて「登場」⁴⁵⁾してくるのである。その理論的基準が資本の蓄積におかれていることを考えるとき、われわれは本稿でとりあつかった問題こそが、スミス

の生産力体系の枢軸をなすものであると考えるのである。

(Received September, 1974)

45) 高島善哉『アダム・スミスの市民社会体系』新版、昭 49, 213 頁。

なお、スミスが産業発達の自然的順序を構築しなけりなかつた理由として、高島善哉教授は次の二つをあげられる。第一に、種々の保護政策を国家に押しつけることによって、一部の階層を不当に利益し、産業の順調な発展を阻害する政策体系であるマーカンティリズムに対して、はげしい反対の態度を表明するためであり、第二に、生産的および不生産的労働に関する規定で、農業こそが他のどんな産業よりも生産的だとした自由主義的なフィジオクラシーの思想への傾斜があつたからだ、といわれる（同氏、『スミス「国富論」理論篇』昭 37, 159～160 頁参照）。とくに、第一の理由を展開していくことが本稿における今後の課題となろう。